

# 西真寺通信

令和三年冬号発行 西真寺

## ●スマホの障害

スマホはとても便利なツールで、現代人、特に若者にとって、必要不可欠な情報源であり、知らない事を調べたり、様々な人々とコミュニケーションを取る手段でもあります。

一方で、精神科医であるアンダー・ハンセンによれば、スマホによって睡眠障害やうつ病、記憶力や集中力の低下が指摘されています。

また、アップルの創業者であるスティーブ・ジョブズは、自分の子供にはデジタルデバイスを与えなかったそうです。

ドイツや韓国では、スマホに

よる「デジタル認知障害」を提言する研究者がいます。ながらスマホにより、集中力が落ち、情報を一度に得られることで、ドーパミンが脳から大量に放出され、脳のオーバーフローによって様々な障害が引き起こされると説明しています。

アンダー・ハンセンによれば、同時並行に全ての情報が得られることで、脳が刺激を受け、この刺激が依存度を高めると指摘しています。

本来、我々人間は、聖徳太子と違って、一度に何人もの話を整理し、理解し聞き分けるという能力を持ちえません。にも拘らず、もっと知りたい、情報通になりたい、「注目を集めたい」「つながっていたい」などの欲

望がスマホによって可能になると勘違いしています。

脳が整理しきれない間に、次の情報や知識を丸呑みしようとしても、もろ刃の剣のごとく、脳細胞が、認知機能を欠落してゆくことは、ある程度予想できます。意識のみに集中することで、各情報の脳内での蓄積箇所が、定まらない内に次の情報が波のように押し寄せてくるからです。そして無意識を含めた創造性やイメージを使わないことから、脳の一部分しか機能しなくなり、他者のことが理解できなくなるのです。

SNSによってつながろうとしても、認知機能だけでなく、人間が本来持ち得ていたコミュニケーション能力さえも、低下することが指摘できるのです。トウウエンギー&キャンベルの研究によれば、「共感的配慮」と対人関係における「感受性」

の能力が八〇年代以降下がっていることが指摘されています。スマホによってこれらの能力が極端に低下し、青年期における孤立性を生んでいると考えられます。

そもそも携帯電話について心理学者が、「移行対象」として説明していました。

乳幼児期に、それまで母子一体であった時期から、幼稚園の先生や祖父母など、母親以外の大人との関わりが増えた際、母親の代わりに成るハンカチやぬいぐるみを見を肌身離さず持ち歩きます。

この母親との距離や親離れの移行時期に愛着する無生物、依存するハンカチやぬいぐるみなどの対象を「移行対象」と呼ぶのです。

親の代わりになり、一時的でも安心を得られる「移行対象」つまり「スマホ」に依存しているのは、青年期における「幼児性」に原因があるのかもしれない。

「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」8  
—親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争—

#### 4. 親鸞聖人の神祇不拝

親鸞の『愚禿悲歎述懐讚』には

かなしきかなや道俗の  
良時吉日えらばしめ  
天神地祇をあがめつつ  
ト占祭祀つとめとす  
かなしきかなやこのごろの  
和国の道俗みなともに  
仏教の威儀をもととして  
天地の鬼神を尊敬す

と呪術的な民俗信仰に対する、決別の内容が、記るされており  
ます。

道俗とは、人間の持つ習俗性を指し、神祇を崇拜する僧侶と世俗人を意味します。

山崎龍明は、親鸞の神祇不拝の本質的意義について、次のように述べています。

親鸞にとって「神祇」を崇拜するという世界は、自我の迷妄心、人間の俗性（世俗性）を全面的に肯定し、人間の願望を充足させる民族宗教性そのものであった。仏法が仏法自らを見失った時「神祇」へと傾斜していくのである。それは、普遍的視座を喪失し、民族主義的な仏教へと退落していく道である。民族を、国家を最優先させてきた排他的な日本仏教の歴史はそのことを過不足なく語っている。

そもそも神道の教義は、仏教を中心として、儒教や道教という外来宗教の影響下に置かれて初めてイデオロギーを備えた民族宗教が実体化され、教義が体系化されたということを前提に考えなければなりません。

仏教では、迷いを「流転<sup>るてん</sup>」や「六道輪廻」（地獄・餓鬼・畜生・天・人・阿修羅）と表わし、天は天神、すなわち衆生の迷いとして捉えられていますので、山崎は「自我の迷妄心」と表現している訳です。

そして親鸞の示す「天地の鬼神」の神とは天神であり、儒教における鬼神と同様に、天神と鬼神を合一した神霊的存在をいいます。この解釈から、先祖崇拜という考えの基になっているのは本来儒教であり、日本の仏教でも、神道の思想でもないことが、ここでは明らかです。

なぜなら、明治の廃仏毀釈の頃までは、「本地垂迹<sup>ほんじすいじやく</sup>」が中心であり、仏教がインドの神々といっしょに日本に伝わった古代日本において、仏を本地として、神は仏の仮の姿という考え

仏教の「本地垂迹」説に基づいて神道教義が成立しており、最初の神道説を主体とした伊勢神道においても、「権現」であったことは、村上重良によって明らかにされています。

また、筑紫申真は、天照大神を祀る皇大神宮の成立は、天武天皇二年（698年）で、それ以前は伊勢大神といわれる地方の地主神にすぎなかったことが分かっています。

ですから日本の神、すなわち「権現<sup>ごんげん</sup>」は、衆生と仏を結ぶ仮の姿であり、縁結びの為の神祇だったのです。この仏を護る側の神が、時の政権によって、廃仏毀釈の頃には、仏教を追い出す側に変化したのです。権力者の「迷妄心」そのものの反映がその俗性であり、その排他性は、山崎の述べる通り、歴史上「過不足なく物語っている」のであります。

（権現<sup>ごんげん</sup>）が当たり前でした。

（次号に続く）

## 死刑制度と悪を考える⑤ 親鸞の悪の捉え方

### 3. 親鸞と釈尊の悪の捉え方

人間は条件次第で、人も殺す心の闇である煩惱を持ち続けています。常に悪に転じる自覚がなくなれば、自分では制御不能に陥ることを、仏教は教えているのです。人殺しについての釈尊の言葉は次の通りです。

すべてのものは、暴力におびえる。すべてのものは、死を恐れる。自分の身に起こることと考えて殺してはいけない、殺させてはいけない。(ダンマパダ)

悪いことが起こると誰かのせいにして、集中的に見せしめの生贄として公にさらし、罵声を浴びせ、咎め、全ての怒りの矛先を向ける社会の風潮にある構造は、学校に潜むいじめと同じ構造を持ちます。これは常に精神性が不安定で、

生き方をまだ見つけられない未熟な人格の集団の暴徒化であり、原始時代の供犠や戦争に通じる構造そのものです。

子ども達が見習う大人たちが同じ態度をとれば、これを良いお手本として模倣することは言うまでもありません。外見だけ立派に見せて自分を大きく見せようとか、権威を誇張して力を行使する大人は、内面が伴いません。釈尊はその未熟さを見抜いていました。

バラモンの髪を結ってカモシカの皮を身にまとった愚か者よ。それが一体なにになるのだ。内側が汚れているのに外側だけを飾っている。(ダンマパダ)

バラモンとは、カースト制度の身分の頂点に立つバラモン教の僧侶の事です。仏の目から見れば、私達が善人の皮を被った

悪人となります。それは他人を咎め、攻撃する心が証明していることとなります。

他人がした事、しなかった事を観察してはいけない。他人のあやまちを観察してはいけない。自分がしたことと、しなかったことだけを、観察すればよい。(ダンマパダ)

他人の嫌な部分はよく見えません。しかし、よくよく考えると自分にも同じような性質があり、それを認めたがらない自分が他人を観察し、傍観者となり、善人の仮面を被ることになります。灯台元暗しとはこのことです。

かつて千人の人を殺したアングリマーラは、釈尊の弟子となって殺された遺族の家に托鉢で廻ることになります。その過程で、石を投げられ、半殺しの目に遇いながらも、彼は托鉢を続けたのです。釈尊は次のように言っています。

悪いことをした人でも、善行によつて償うならば、その人はこの世を照らすことができる。雲から離れた月がそうであるように。(ダンマパダ)

人を殺した人間が善行によつて、罪や悪が消え去るわけではありません。一生かけて償う業を背負いながらもその人の生き方を全うすることが出来ることを示しています。

アングリマーラは悪人ですが、善人と称する人よりも本当の自己、真実に出遭うことが出来たのです。

そして、仏教は、人間が再生できる道筋を教えてくださいます。一方偽善者は、内省を拒み続け、変容の道筋が閉ざされることになるのです。(次号に続く)



### ■ 霊魂について3

極楽浄土に往生すると言いますが、霊魂でなければ、何が浄土に往くのでしょうか。

「阿頼耶識」が浄土に生まれる、我々の「識」そのものが転換し、超越することを示しています。

親鸞聖人は、「臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す」と肉体を持ったままの心(識)が、信心によって往生を得て、自己に目覚め、仏に成るはたらきを表現しています。つまり、心と体が一体となって、ひとつの心「識」になるという目覚めです。

「識」が転依(てんね)依り所を転ずる(し)し、転入する過程で、仏との一体性に気づかせてもらい、自己に目覚めるのです。この過程を生きている間に体現し、死後もそのまま継続するはたらきを親鸞は、「超証す」と示したのです。

「超証」とは、横超であり世俗に居ながら、生死(迷い)の世界から、時間も空間も超えてゆく世界観、往生浄土を示しています。

例えば、人間を形成する組織細胞の基本は遺伝子にあります。が、遺伝子だけが全てではありません。

疾患についても先天性と後天性があるように、後天性に関しては、設計図である遺伝子ゲノムが、環境ホルモンの影響を受けると発現を狂わせることがあり、先天的な遺伝子の作用を変えて往く作用があります。

環境ホルモンの影響については、まだ原因究明を含め明らかにされていません。しかし、仏教では、心身作用を

種子生現行

現行薫種子

と示しています。

私たちの先祖や親、民族性を含めたものが行為となって表象されるのが「種子生現行」で、今の行為が新たに種子として「薫習」される(香りが染みついて残り、蔵に蓄積される)ので、「現行薫種子」として、後天的な要素が自己を変えて往く、つまり変容の過程を経るのです。

私たちの行為によって、私自身の根幹を形成する「阿頼耶識」が変わるということは、三業(身・口・意)が集積した蔵ですから、身体性が伴うということです。そして、「識」が転依する過程での、無限なる仏との一体性とは、まさに自己の内なる有限世界がそのまま超越した無限世界へとつながる「超証」そのものです。

仏との一体性とは、内なる自己がそのまま仏を内蔵する訳ではなく、内なる有限性(凡夫)とつながる無限性(仏)がはたらきかけ、その「両価性」である、相反する本質を持ちながら目覚めるという

ことになります。

この「両価性」の目覚めが、凡夫(南無)と仏(阿弥陀仏)との一体性、すなわち南無阿弥陀仏の名号となって、生きている間に必ず浄土に真の身となつて往生するのです。親鸞はこのことを「報土(浄土)の真身を得証する」『教行信証』と説いています。

この「涅槃への過程」を、生きている間に体現したまま、死んで往くことが出来る境位が、自己への目覚めであり、信心が成す往生のはたらきなのです。

故 安富信哉先生は、親鸞の「証道今盛んなり(中略)これ決定往生の徴(しるし)也」『教行信証』から、往生は死に直面した「点」で捉えるのではなく、証道と示されるように連続した「線」として見る必要があると「涅槃への過程」を示して下さいました。(次号に続く)